

2003 年度

谷口ゼミナール

卒 業 研 究

- 要 約 -

## 「環境教育におけるネイチャーゲームの役割」

文学部人間科学科4回 上村 恵子

### 要約

環境問題が大きく取り上げられている今日、環境問題の解決に向けて環境教育が切り離せない役割を担っている。その環境教育において大切なのは自然体験活動である。自然体験において、自然を「楽しむ」という行為は切り離されない大切なポイントである。今回注目したネイチャーゲームとは、楽しく遊びながら自然の仕組みを理解し、五感を使って自然を感じるプログラムである。基となるのはジョセフ・コーネルの考案した「シェアリング・ネイチャー・プログラム」であった。1970年代、日本では環境保護活動が盛んに行われており、「自然を分かち合う」という体験は、環境活動のひとつとしてすぐに日本の活動に取り入れられた。そして、ジョセフ・コーネルの刊行した「Shearing Nature With Children」を訳す際に日本ナチュラリスト協会が議論を重ね、日本人によりわかりやすくするため「ネイチャーゲーム」と名づけた。

現在日本において、ネイチャーゲームは全国的な展開が行われているが、自然に対する知識や経験は関係なく、誰にでも受け入れられやすいネイチャーゲームは、自然を楽しむという点で理解しやすい。また、そのネイチャーゲームには思想的背景があり、創設者といわれているジョセフ・コーネルのシェアリングの思想はもちろん、アメリカ先住民の自然を敬い、自然とともに生活する自然観が影響されている。さらに、ネイチャーゲームは自然に対して気づくことを目的とし、自然に気づくために五感を使うことで感性へ働きかけている。

五感を使って自然を感じることは、自然に親しみ自然を理解する環境教育の第一歩である。現在もネイチャーゲームが環境教育プログラムとして本格的に組み込まれるにはまだまだ改革が必要であるが、ネイチャーゲームは自然を深く体験するという行為にとどまらず、他者との分かち合い、自然との分かち合いを通して感性を覚醒させることができるのである。感性の覚醒は、人間の本質に働きかける重要な役割を担っていて、感性の覚醒によって意識化し人格形成に大きな影響を与える。そして、感性の覚醒につながる自然体験の最初の取り組みとして、ネイチャーゲームが環境教育において大きな役割を果たすことができる。

弓道とは、日本人が古き時代から行なわれている、伝統的な武道の一つである。狩猟用として生み出された弓は、時代の移り変わりとともに進化し現代のような形になった。形だけ見るとわずかな進歩しかしていないが、その心的感覚は、その長い歴史とともに異常な注意が続けられてきた。弓道を嗜んでいく上では、精神との関わりをはずすことはできない。その中で礼を重んじていることからそれはわかる。日本人の礼節を大切にすることの気質こそ、弓道はもちろん、全ての「道」を形作っている。また、弓道の心に真善美というものがある。正確さを表わす真、倫理的要素をもって真を尽くすという善、それらが合わさったところから生まれる美の三つだ。より気品高い型の流れや弓道の本質でもある礼はこれを求める純粋な心から発生するのだ。弓道の本質とは、その表面的なものではなく、内面で起こっているものに目を向け、自分を発見するということにある。

次に武道に必要な精神力とは何かを、武士道と繋げて見ていく。武士の中でも宮本武蔵を取り上げたい。武蔵は何事においても常に冷静に向き合い、また覚悟を決めて行動することを自分の生き方としていた。広い視野で真実を見極め、心が片寄らぬように真ん中に置き、常に流動自在な心の状態を保つことに注意をはらう。この心持ちは、武道ならば全てのことに通じるものである。心の乱れは身の乱れという言葉の通りだ。心に乱れができないようにするには、自我意識と対面しなければならない。自分自身と向き合うことで集中力も高まり、今自分がすべき事がわかるようになる。そして自分の行動に責任を持つことが必要だ。これらのことは、武道を嗜むうえではとても大切なことであり、現在の武道に求められる精神とも言える。また、この精神は「無心」によるものでもある。結果を求めていっても必ず失敗する。何も欲しない、何も求めない自然な状態であることが望ましいのだ。無心の状態になれば、我執からの離脱が発生する。この状態は決して空っぽなのではない、集中力が最高まで上り詰めた状態だ。これこそ弓道をやる上での理想的な状態といえる。

弓道は、先に述べてきたように単なるスポーツではなく、昔から伝承された日本人の伝統的な熱い魂をその中に見ることのできる特別なものである。その根源は精神の修練の中に求められ、弓を引く射手は、常に自分自身と向き合わなければならない。時代が進むにつれて、その精神は常に成長していくのだ。様々な経験、成功や失敗、挫折などの積み重ねにより形が作られていく。また、弓道を含め武道というものは、西洋にはない独特の東洋的な思想のもとにあるといていいであろう。絶対というものはないし、こうでなければならないというものもない。この、他の国にはない独特な思想こそが、現在でも武道が日本特有なものとして存在し続ける根源なのではないだろうか。

昔の弓道、現在の弓道、やり方や外面的な部分に多少の違いはあるが、その中にある精神は現代に伝えられてきた。これからも伝えられ日々進化していくだろう。それは私たちの手によって、より濃度の濃いものへと変わり、未来へと移行していくのである。

子どもの健全な成長をめざして  
- デューイの教育哲学を手がかりに -

文学部人間科学科4回生  
楠 てるみ

現代の情報化社会の中、昨今の子供たちは自分の世界と価値観の中に閉じこもり、他とつながりを持つことを嫌う傾向にある。個と個が上手に関わり合い、良い社会集団を作り上げるには、互いの立場を尊重し、互いの距離感をしっかり認識する力を身に付けることが大切だと思う。

平成 14 年度から実施された学習指導要領に基づき、ゆとりの教育、個性を生かす教育、また生きる力を培う教育がなされている。

第 1 章では、現代の中学生と親の生活態度、そして学校が抱える時間と心のゆとりについて、さらに管理教育における教師の義務と心情の矛盾を明らかにする。その上で、学校を心地よい学びの場にするにはどうするべきか、意欲的に学び、自己決定や自己責任が取れる生徒を育成するにはどうしたら良いのかを考える。

第 2 章では、エリクソンの理論に基づき、思春期の心理的・社会的発達課題を理解し、現代の親子関係がどのように子供の発達課題の獲得へ影響を与えるか考える。

最後に第 3 章ではデューイ教育哲学を手がかりに、学校教育における「個性」と「自由」の本質、また、環境教育における自給自足体験を通して得られる社会性について考察する。

ゆとりの教育がなされる中、現代の子供の課題と教師の現状を考察すると、生徒にとっても教師にとっても時間的、精神的ゆとりが欠けていることが分かった。また、情報化社会に伴い、子供の持つ価値観が急激に変化する中、教師と親が信頼関係を築き共に子供たちの成長を援助することの大切さを再確認した。

社会や学校で問題が起こるたび、その原因は何であるのかと考えられ「親のしつけがなってないからだ」「今の教師は生徒に対して甘すぎるからだ」「教師の質が低下しているからだ」などといわれている。それらの問題は単独の原因が引き起こしているのではなく、その裏には、家庭環境、社会環境、子供の発達過程の問題、学校制度の問題などが複雑に絡み合っただけでなく、子供たちの背後に見え隠れしている。

親や教師は、複雑に絡みあった問題に時間をかけて取り組み、教師と親、そして地域が、それぞれの立場に立ちそれぞれの役割をしっかりと果たすことが大切である。

さらに大切なことは、近視眼的に子供の成長を見るのではなく、子供の将来を長く見据えた教育を考えることである。子供はやがて教師の手からも親の手からも離れ自らの人生を歩む。子供たちが自らの足で歩き始めたとき、今度は彼らを取り巻く人々や、社会によって教育される。つまり、子供はやがて世間に育ててもらおうという意識と展望を持ったしつけが大切ではないだろうか。

そのためには、人を信頼し、素直に耳を傾ける謙虚さ、そして自分の人生をしっかり歩いてゆく力強さを育成することが我々大人や教師の役目であると思う。

## 学校教育における自然体験の意義 - 臨床教育の視点から -

文学部人間科学科4回生

10014030 田畑 北斗

平成8年に出された中央教育審議会答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(第1次答申)」において「生きる力」が盛り込まれ、総合的な学習の時間の増設に至った。その総合的な学習の時間における横断的・総合的な課題の一つとして「環境」があげられており、環境教育が行なわれている。そして、環境教育の一つのプログラムとして自然体験がある。自然体験は単に自然環境下での活動を示しているのではない。自然環境において、身体や精神といった二元的な発想を超えた人間そのものである「身」でもって全人的に人間が経験すること、つまり人間と自然との相互関係において積極的に人間が自然を感じ、人間と自然が関わることである。そうした自然体験を通して子どもは好奇心を育み、積極的に知識を身につけ、さらには知恵を身につけていくことだろう。そしてこのようにして身につけられた知識や知恵は再び自然体験や実生活の中で生きてき、さらなる成長をもたらすことだろう。

一方、現在の学校教育では、いじめや不登校といった教育病理が問題となっており、心のケアや心の教育の必要性が言われている。このような諸問題の解決にむけて臨床心理の視点からのアプローチがなされている。ここではさらに教育における臨床心理を考えていくことから臨床教育という視点からのアプローチを試みることにする。臨床という言葉は医学用語であり、その意味は死の床にある人の傍らに座り、死に行くひとのお世話をするということであるが、この意味を広く捉え、単に死に絶えることなく別の世界に向かうプロセスと考えることができる。このようなプロセスが教育でなされるという考えが臨床教育なのである。さらにこのプロセスにおいて「いかに生きるのか」ということがテーマとしてあがってくる。このことを生と死の見つめ体験することが教育として必要となってくるのである。そのためには共に歩むための教育者が必要になり、園芸やキャンプなどの自然体験を通して、「生と死」を感じ、それについて考えることができるようになると考えられる。

自然体験を通して生と死を感じ、いかに生きるのかを考えることが「生きる力」の育成につながる。また、現在の学校教育において臨床心理は、おおよそ治療、予防、開発の三つの観点から教育相談という形でおこなわれている。この生きる力の育成と教育病理の解決という学校教育における課題は、「いかに生きるのか」というテーマでつながっており、そのため自然体験という方法によって2つの課題にともに取り組むことができるのではないだろうか。そのために学校教育に身近なところから自然体験を取り入れ、教師が単に生徒に教えるだけでなく、生徒ともに同じ感覚で自然体験することで生徒たちの意欲や関心、態度が育成されるだけでなく、「いかに生きるのか」というテーマに取り組むことができるだろう。

現在、私たちは様々な地球環境問題を抱えている。1962年にレイチェル・カーソンの『沈黙の春 (Silent Spring)』が出版され、環境問題が世界の関心事となってから40年あまりが経過したのだが、環境問題は解決に向かって前進しているのだろうか。環境問題について広く知れ渡り、環境保護に理解を示す人や持続可能な社会に関心を持つ人が増えているのは事実である。しかし、車に乗る人やエアコンの使用が減らないのはなぜだろう。環境負荷を軽減する知識があったとしても、実行に移すとなると難しいのはなぜだろう。そこで環境問題の解決に向けて、私たちの環境観とライフスタイルの考察を中心として、私たちの環境に対する意識や行動について見直していく。

第1章では、私たちはいかに人間中心主義的な環境観を持っているか、そしてその人間中心主義が環境問題とどのように関係しているか考えていく。そして次に、環境問題を考えるにあたって生態系中心主義的な環境観が必要であることを述べていく。最後にアルド・レオポルドの「土地倫理」を手がかりに生態系倫理について考え、私たちの環境観の再構築を図る。

第2章では、私たちの価値の転換に向けて環境教育が果たす役割について考察する。まず、教育における環境教育の必要性について述べていき、次に環境教育が重視する体験学習の必要性について考えていく。最後に、環境教育の課題を挙げ、環境教育の推進に向けて考える。

第3章では、地球環境問題の解決に向けて、ローカルな視点とグローバルな視点を踏まえ環境観とライフスタイルについて考察する。まず、私が実際に体験した自給自足生活の体験学習から現代のライフスタイルについて見直していく。次に、ストックホルム会議を取り上げて環境問題の本質について考える。最後に、これまで述べてきたことを踏まえ環境問題の解決に向けて何が必要か考察する。

現代社会は多様な価値観が存在する世の中なので、何を大切とするかは人によって様々であるが、環境問題は人類にとって重大な問題であり、解決することなしに人類の豊かで持続的な発展はありえない。

私たちは、人間中心主義の行動が招いた環境破壊・汚染について深く反省し、生態系の観点に立って人間活動が生態系へ与える影響について考えて行動しなければならない。そして、生態系を保全することを目的とし、資源については総合的、長期的に考えて活用していくことが重要である。このように私たちの環境観を生態系中心主義的な環境観へと再構築することが必要なのだ。そして、私たちのライフスタイルを改善し、地球に対する環境負荷の低減された社会へと移行し、現代社会の悪循環を断ち切らなければならない。また、環境問題の解決に向けて、私たち一人一人の行動が環境問題と密接に関わっていることを認識し、環境問題に対する共通の理解を深めるために環境教育を推進させていくことが必要なのである。